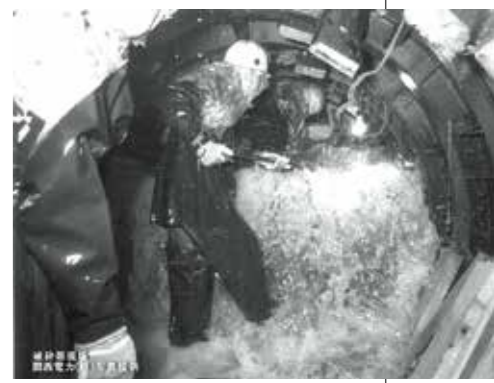


「くろよん」の概要

黒部川第四発電所（通称「くろよん」／一九六三年完成）は、戦後復興における関西地区の深刻な電力不足を解消するために関西電力が富山県黒部川の最上流部に建設したものである。黒部川の電源開発は宇奈月温泉を拠点に大正時代に開始され、戦前には黒部川第三発電所（二六〇度超の高熱帯に遭遇）までが完成していたが、「くろよん」は更にその上流二〇キロに計画された。この区間はV字峡谷・断崖絶壁が立ちほだかり、加えて、ダム建設（高さ一八六メートル／堤頂長四九二メートル／堤体積一八八万立方メートル）には、そ



水抜きトンネル：人海戦術（提供：笹島建設株式会社）

れまでとは比較にならない大量の資機材の運搬ルートをいかに確保するかが大きな課題であった。

建設の成否が掛かる資機材の運搬ルートが大断層「破碎帯」に遭遇

これまでのルートだけでは予定工期を満たせず、長野県大町市から県境を越えて約五キロのトンネルで北アルプスを貫き、ダム建設サイトに直結する大町ルート（現・関電トンネル）が採用された。

一九五六年八月、掘削が開始された。担当は、佐久間発電所建設で米国製の大型重機を使用しトンネル高速施工（全断面掘削）の実績があった熊谷組の笹島班である。

「くろよん」完成六〇周年
「不可能を可能にした」
「一〇〇〇万人の人間力」

元・株式会社熊谷組
代表取締役会長

大田 弘



Hiroshi Ohta



黒部ダム全景（提供：黒部市歴史民俗資料館）

平均日進一〇メートル、当時の掘進日本記録を塗り替えるスピードでの順調なスタートであったが、中間地点付近で轟音とともに切羽が大崩壊、大量の湧水によりトンネルは川と化した。懸念されていた「破碎帯」との遭遇である。

一向に減ることのない地下水と軟弱な地盤は行く手を阻み、常に崩壊の危険と隣り合わせの日々が何か月間も続いた。更に「黒部は危険」とのニュース報道もあって「チキトク スグカエレ」などの電報が連日作業所に届くようになり、山を下りる作業員が続出、「くろよん」建設は危機的な状況となった。

運命を変えた社長視察と一枚のハガキ

破碎帯に遭遇してから三か月後、一向に状況が好転しないなか、関西電力の初代社長である太田垣土郎が現場を訪れた。「社長、これ以上先に行くのは止めてください。極めて危険です」と周囲は制止した

が、太田垣は「何を言っているのかね、ずっと奥で作業員が働いているじゃないか。その危険な仕事をさせている責任者の私が行けないとはどういうことかね」と言っただけに進んだ。水抜きトンネルの最先端で太田垣は笹島に問う。「どうかね、掘れそうかね」と。笹島は「何とかなるとしよう！」と即答。太田垣一行を長時間危険地帯に曝すのを避けたのだ。

そして、数日後、宇奈月消印の一枚の葉書が太田垣から笹島に届いた。「皆様方の明るい表情を見て安心した……日本の土木の名誉にかけて頑張ってください」と。笹島は宿舎にいた作業員を招集し檄を飛ばした。「関電の社長は我々作業員と同じ立場で破碎帯と向き合っている」「よほどの覚悟と決意を持って視察されたのだ」「下請の意地にかけて抜く！」と。この時、笹島は太田垣に心底「惚れた」という。太田垣の行動は周囲に感動を与え、作業員の「野性」にも火を点けた。まさに運命を変える視察と一枚の葉

書となった。七か月間をかけて不可能と云われた破碎帯（八〇メートル）を突破。「くろよん」の建設は一気に加速し完成、延べ一、〇〇〇万人に及ぶ人間力の結晶であった。

「くろよん」が遺したものの「志は連鎖する」

笹島が太田垣と再会したのは「くろよん」完成式典だった。二、〇〇〇人を超す大会場の末席にいた笹島が太田垣に呼ばれた。「やあ笹島君、久しぶりだね。覚えてるかね？ 太田垣だよ」「おかげでくろよんができたよ。ありがとう！」と言って手を握ってくれたという。破碎帯視察以来六年ぶりの再会、笹島は直立不動で言葉も出さず、涙が止まらなかったという。

「くろよん」の後、笹島は「怒鳴っても駄目、甘やかしても駄目、惚れさせる」を人の使い方のモットーとし、青函トンネルなどの難工事に立ち向かったが、「くろよん」のことを思い起こせば困難な現場は一切な

かったという。

一五年ほど前、筆者が故郷・宇奈月に帰った時のこと、村の老女が私にこう言った。「大町での私の担当は炊事係」「男衆の元気の源は腹いっぱい食べるご飯、私の炊くご飯は日本一だと誉めてくれた」「こう言っただけだが私がいなかったらくろよんはできなかった」と。

「くろよん」が遺したものの一つは戦後復興・経済発展、一つは土木技術の飛躍的発展。そして最もすごいことは、太田垣から笹島、村の老女まで「全員がエッセンシャルワーカー」という「志の連鎖」を起こしたこと、つまり「人間力のすごさ」人そのものであった。「くろよん」での作業員リクルート作戦は「白米食べ放題」だった。過ぎる豊かさを享受する現代社会で通用する話ではない。

ただ、「くろよん」を日本昔話として捉える訳にはいかない。もう一度、何処かに置き去りにしてきた大切なこと、共生（ともいき）を取り戻す必要があると思う。

（敬称略）